불교학연구 (Journal for Buddhist Studies)
제57호 (2018.12) pp. 23～58

東アジア漢文佛教文化圈の華嚴章疏の傳承と現狀
－『新編諸宗教藏總錄』と日本章疏目錄の比較を中心に

朴鎔辰
能仁大學院大學校 佛教學科 助教授
pyj04667@hanmail.net

I. はじめに
II. 『新編諸宗教藏總錄』に收錄された華嚴章疏の現狀と特徵
III. 『新編諸宗教藏總錄』と日本章疏目錄の華嚴章疏
IV. 華嚴章疏の傳承と系統：澄觀撰述の大藏經入藏と系統を中心として
V. おわりに

요약문

본고는 동아시아 한문불교문화권에 있어 『新編諸宗教藏総録』에 수록된 화엄경 장소에 대하여 일본의 제장소목록과의 비교를 통하여 전승과 현상을 분석한 연구이다. 이상의 내용을 요약하는 것으로 결론을 대신코자 한다.

『교장총록』에 수록된 화엄장소의 傳存現況은 全體 177部 가운데 大略 68部가 刊·寫本의 形態로 傳存되고 있고, 현재 약 38%가 남아있다. 華嚴宗 章疏의 原刊本은 日本 東大寺에 澄觀의 「大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔」, 大東急文庫 所藏인 澄觀의 『貞元新譯華嚴經疏』 등 4종이 확인된다. 『교장총록』의 편찬과 간행은 불도의 증득을 비롯한 호법과 관련이 있다.

그에 이르는 방편은 <경-논-소초기과>라는 위계, 화엄조사의 시대순 배열, 신라나 요의 저술을 구분하여 수록한 것에 그 특징이 있다.

『교장총록』과 같은 시기에 편찬된 일본의 목록은 914年에 편찬된 『華嚴章疏幷因明録』, 1094년의 『東域傳燈目録』, 평안시대의 『古聖教目録』이 있고, 13세기의 화엄장소로는 『高山寺聖教目錄』, 『華嚴宗經論章疏目錄』이 있는데, 이들을 상호 비교하였다. 특히, 『교장총록』에 수록된 징관과 종밀의 화엄장소는 10세기 일본 장소목록에서는 확인되지 않아 전래나 그 활용은 보다 검토할 필요가 있다.

화엄장소의 전승과 계통을 알기 위한 시론으로, 징관의 『華嚴經隨疏演義鈔』와 『華嚴經疏』의 대장경 입장 및 계통을 검토하였다. 『華嚴經疏』의 권별 계통은 20권본, 40권본, 60권본이 있었고, 『圓超錄』의 30권본을 추가할 수 있다. 『華嚴經隨疏演義鈔』는 『東域錄』 단계의 30권본, 고려간본 40권본, 13세기 栗棘庵藏 남송간본 60권본이 유통되었다. 이후 『凝然錄』에 따르면 주로 40권본이 동대사를 중심으로 유통되어 활용되었다. 근대에는 『大正藏』에 명대의 대장경을 저본으로 한 90권본을 수록하여 현재 불교학 연구에 활용되고 있다.

주제어
新編諸宗教藏總錄, 華嚴章疏幷因明録, 東域傳燈目錄, 古聖教目録, 高山寺聖教目錄, 華嚴宗經論章疏目錄, 華嚴經隨疏演義鈔, 華嚴經疏

I. はじめに

東アジア漢文仏教文化圏の仏教交流と傳承は、大藏經と教藏を中心に行われた。漢文大藏經には、経・律・論の三藏以外に注釈書に代表される章疏類が時代別に多様に入藏されてきた。しかし、実際に中国において華嚴宗や天台宗など章疏類の入藏は宋代に行われ、大藏経の入藏目録である『開元釋教録』のような大藏目録はあったが、章疏目録は編纂されなかった。この時期、高麗時代の大覺国師義天によって編纂された『新編諸宗教藏総録』(以下、『教藏総録』)は、11世紀東アジア漢文仏教文化圏の諸宗章疏を總集した章疏目録とすることができる。

ところで、『教蔵総録』に収録されている章疏は、当時の東アジア漢文仏教文化圏において、その伝承と現状がどの程度反映されていたかについて検討する必要がある。本稿では、義天の編纂である『教蔵総録』に収録されている華厳章疏を中心として、日本に現傳する古目錄との比較を通じて東アジア仏教界の華厳章疏の傳承と現状について検討する。

既存の研究において、11-12世紀の東アジアの仏教文化圏の佛教研究で大蔵経の研究はかなり進んでいるが、佛教章疏の交流と伝承、そしてその現状に関する比較分析はこれまで注目されてこなかった。また、東アジア仏教界の華厳章疏の現状と特徴などについては、ほとんど仏教学や思想の研究であり、総合的な分析は行われたことがない[1)]。 現在、高麗大蔵研究所の「高麗教藏の結集とDB化プロジェクト」が東国大学の協力によって行われている。一方、日本の章疏に関する研究は、落合俊典氏による經典章疏目錄に対する調査報告があり[2)]、その他、高山寺など様々な寺院の所藏目錄を通じた研究が進められている。

本稿は、以上の研究を参考にしながら、高麗・宋・日本など東アジア仏教界の華厳章疏の伝承と現状について検討する。まず『教蔵総録』に収録されている華厳章疏の傳存の現況と特徴を分析し、さらに日本に傳存する章疏目錄と比較する。特に、仏教章疏の伝承と活用の現状は、日本の傳存章疏の目録を通じて可能であり、『教蔵総録』と同時代の章疏目錄として、914年に編纂された『華厳章疏幷因明録』、1094年の 『東域傳燈目録』、平安時代の古寫本 『古聖教目録』 などの関連目錄によって華厳章疏の現況を比較する。このような分析を通じて、東アジア仏教界の教学や仏教の相互交流研究に基礎資料として活用されることを期待する。

---

* 能仁大學院大學校 佛教學科 助教授

1) 最近の大蔵經と教藏の研究現況と展望は南權熙,「韓國의 大藏經 研究 現況과 展望-2000년대를 중심으로」『日本에 流通된 古代韓國의 佛教典籍과 佛教美術』발표논문집, 新羅寫經프로젝트國際워크숍, 2012. 教藏に対する研究は高麗大藏經研究所の高麗教藏結集とDB化プロジェクトチームの2012年から2018年現在までの研究報告がある. 本稿は、2014年の高麗諸宗教藏学術調査2次報告会で発表した「『新編諸宗教藏總錄』と東アジアの華厳章疏」『高麗諸宗教藏と華厳經章疏』(서울:高麗大藏經研究所, 2014) について、2014年以後2018年現在まで、調査した内容を修正し増補した.

2) 落合俊典,『中國・日本經典章疏目錄』(東京: 大東出版社, 1998).

II.『新編諸宗教藏總錄』に収録された華嚴章疏の現狀と特徵

1.『新編諸宗教藏總錄』華嚴經章疏の現況

義天の『教藏總錄』は、独自の分類体系によって経･律･論の章疏を配列しているが、これには彼の教学思想による経典觀･章疏觀が反映されている。『教藏總錄』の經部には華嚴經の章疏が177部1,242卷、律疏には梵網經や遺教經など、論疏には大乘起信論34部85卷、成唯識論29部265卷、天台關係章疏は39部140卷がそれぞれ収録されている。

『教藏總錄』の收錄章疏は、華嚴經章疏が177部1,247卷と最も多く入錄されている。これは華嚴經の長い歷史において、経典の数量が膨大であることに起因するが、義天が『教藏總錄』を編錄する時、華厳宗の立場で集錄したためでもある。『教藏總錄』の経･律･論に収録されている章疏の最初の部分は、華嚴教學と關聯した經典の註疏を載せている。經部では華嚴經・涅槃經、律部では梵網經、論部では大乘起信論など華嚴教學と関連がある章疏が最初に配置されている。

高麗時代の華嚴章疏の現況は『教藏總錄』に收錄されている華厳章疏によって、その大略がわかり、本稿では別添の<資料1>のように『教藏總錄』に收錄されている華嚴經の章疏177部の現況を分析して整理した。特に、11世紀の高麗に傳存した華嚴經章疏の現傳を調べるために漢文大藏經や刊･寫本を調査して現況を提示した。

別添<資料1>で提示したように、『教藏總錄』に收錄されている華嚴經章疏の傳存現況を見ると、全體177部のうち、おおよそ68部が刊･寫本の形態で傳存されているが、1090年當時の華嚴章疏は約38%が東アジア仏教界に残っているわけである。これら章疏の多數は日本に伝存し、『大正新修大藏經』(以下、『大正藏』)や『卍續大藏經』(以下、『卍續藏』)に収録されている。これら章疏について、『大正藏』には底本が提示されているが、『卍續藏』にはその確認が必要である。

教藏都監で刊行された華嚴宗章疏の現傳資料を見ると、原刊本である東大寺蔵の澄觀の『大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔』、大東急文庫藏の澄觀の『貞元新譯華嚴經疏』、

京畿道博物館藏の澄觀の『華嚴經疏』、清涼寺藏『法界觀式鈔』など4種、その他朝鮮時代重修本や飜刻本など全體で50餘種が把握されている。敎藏都監刊行の原刊本を含む有刊記の資料が20種であり、『敎藏總錄』に収録されていない『大方廣佛華嚴經談玄決擇』を除けば、19種になる。その他の重修本と飜刻本と推定されている章疏が、27種確認される。最近、高麗時代の原刊本と推定される新出資料として、宋代の遵式が撰述した『摭要鈔』四卷が挙げられる。この『摭要鈔』は卷第3の斷片3張が腹藏物の一部として発見された[3)]。

『敎藏總錄』を編纂した「海東傳華嚴大敎沙門」義天の立場で重視した華嚴祖師を調べるために、『敎藏總錄』に収録されている主な華厳祖師の章疏の數を調べることとする。『敎藏總錄』を編纂した時期より後代のことだが、義天は1101年に弘願寺で九祖堂を創り、華嚴九祖を配定した。義天の九祖說と淨源の七祖說には違いがあるが、両者が杜順、智儼、法藏、澄觀に関心を傾けている点は共通する。これらの華厳関連の收錄章疏數を整理すると、杜順が2種2卷、智儼が6種14卷、法藏が20種53卷、澄觀が16種97卷、宗密が6種35卷、淨源が9種151卷である。

義天は、杜順-智儼-法藏-澄觀-宗密-子璿-淨源につながる華嚴祖師の文類を多数収録している。『敎藏總錄』全體で收錄されている華厳祖師の著述は、智儼が12種29冊、法藏が26種68卷、澄觀が15種57卷、宗密が20種120卷、淨源が18種34卷である。章疏の卷數では宗密が120卷と最も多いが、華嚴經の文類の種數は法藏の20種53卷が最も多い。華厳の祖師の著述數に差があることを考慮しなければならず、『敎藏總錄』に法藏の疏鈔が多数収録されている点は、義天當代に法藏の華嚴章疏が多数流行して、活用されたことを意味する。また、義天が法藏の華厳教学に注意したことは、『圓宗文類』卷14の「諸文行位類」を編纂する際、法藏の『探玄記』を中心に智儼の『搜玄記』などの撰述を参考にしたことは、これと軌を一にする[4)]。

に宋代の華厳宗は淨源によって華厳宗が再興され、彼は法藏の『妄盡還源觀』を

3) 南權熙,「諸宗敎藏文獻을 어떻게 접근하고 연구할 것인가」,『東아시아 佛敎章疏와 大覺國師 義天의 諸宗敎藏』(서울: 高麗大藏經硏究所, 2017), pp.90-103.

4) 朴鎔辰,『義天-그의 생애와 사상』(서울: 혜안, 2011).

註解した『華嚴妄盡還源觀疏鈔補解』など17種を著述した。義天は入宋求法を前後して淨源と交流しながら、彼の著述を求めて『敎藏總錄』に收錄している。

2.『新編諸宗敎藏總錄』華嚴章疏の特徵と意義

『敎藏總錄』の編纂と刊行は、佛道の證得や護法と関連がある。これに至る手段として、経典に対する理解は疏鈔の効率的活用を通じて可能である。『敎藏總錄』の章疏分類基準を見ると、<經律論分類-大小乘の2乘区分-疏鈔記科の位階的區分-著者時代順配列-新羅・高麗・遼の章疏別途配列>の獨自的基準によっている[5)]。

『敎藏總錄』の華嚴經章疏の收録基準を見ると、大きく敎門、觀門、品章、辭彙・傳記・禮讚・その他の類などで大別することができる。一見、章疏の配列が混雜しているかのように見えるが、そこには明確な基準によって配列されていることがわかる。別添<資料1>章疏の連番1番『華嚴經疏』から32番『華嚴大不思議論』までが敎門に相当するもので、<疏、鈔、記、論、科>等の順序に配置して華嚴經に対する大志を理解する方便門を提示したわけである。敎門の章疏の配列基準の一番目は、疏・鈔なと經典理解や入道の方便門に該当する。例えば1番と2番は慧光の『華嚴經疏』と『華嚴經略疏』である。これは<疏-略疏>の順に配列して経典の理解のための位階を提示したものと見られる。

また、澄觀が撰述した章疏は連番13-19番に該当し、章疏の位階と華嚴祖師の時代的な配列と關聯を持つ。まず澄觀の『華嚴經疏』に続いて、彼と善來が排定した科を提示しているが、これは、80卷『華嚴經』の39品について解析した澄觀の『華嚴經疏』の大綱を知るための科文である[6)]。善來が排定した科は現傳しておらず、明らかではないが、これも澄觀の『華嚴經疏』 に対する科文と判断される。続く澄觀の『華嚴經隨疏演義鈔』は、『華嚴經疏』に対する義理を敷衍したことで<疏-鈔>の位階を見せている。道弼の『演義集玄記』、『演義逐難科』、思孝の『玄談鈔逐難科』も『華嚴經隨疏演義鈔』の義理を敷衍したのであり、またはこれに対する科文

5) 朴鎔辰,「高麗時代 敎藏의 刊行과 流傳 및 그 意義」『韓國學中央研究院資料集』, 2012.

6) 澄觀排定,『大方廣佛華嚴經疏科文』卷1 (『卍新纂續藏經』5).

と推定され、結局、<疏-鈔-記-科>の位階に加えて華嚴祖師の時代順によって小主題に群別分類したことがわかる。

第二の基準は、華嚴祖師の時代順配列である。その順序は、慧光(光緣、468-537)-慧遠-智正-智儼-法藏-慧苑-法詵-宗一-神秀-澄觀-智昭-宗密-道弼-思孝のとおりである。すなわち、華厳の祖師の活動時代であり、著述時期を基準にまとめたわけである。一方、義天は宋の淨源が立てた華嚴七祖說について自分なりの華嚴九祖說を立てている。『敎藏總錄』を編纂した時期より後代のことだが、義天は1101年に弘願寺に九祖堂を作り、華嚴九祖を祀った[7)]。

義天は、既存の華嚴祖譜の代わりに、新たに九祖を設定したが、それが馬鳴・龍樹・天親・佛陀・光統・杜順・智儼・法藏・澄觀である。淨源の七祖と比較すると、義天の九祖は天親・佛陀・光統を加え、宗密を除外した。つまり、義天の華厳思想は、法藏から宋の淨源につながる正統派華嚴思想を重視しているが、多少の違いがあるわけである。華嚴九祖說で三家を強調して、宗密を除外している点は注目に値する。これは、三家の敎判によって彼の華厳思想を展開したことがわかる。さらに、馬鳴・龍樹の他に天親・佛陀・光統を加えたのは、攝論や地論など初期華嚴敎學に対する理解を反映している。義天は華嚴九祖の著述のほとんど収録し、特に佛陀の『華嚴經指歸』、慧光の『華嚴經疏』・『華嚴經略疏』・『廣釋義章』を収録している。これは、インド以來綿々と続く華嚴宗の歴史性と正統性を強調したことと無関係でないようである。

第三の基準は、新羅の華嚴祖師や遼の著述を區分して收錄したものである。別添の<資料1>連番23-24は新羅元曉の『華嚴經疏』と太賢の『華嚴經古跡記』である。<疏鈔>の基準や華嚴祖師の時代別の基準によると、中國の法藏の前後に配置されなければならないが、<疏鈔>としては最後であり、<注>や<論>の前の部分に配置している。また、遼僧の場合も最後に配置して、中国の著者と区別した。連番127-128は思孝の著述、129-136は智通から緣起・明晶・梵如など新羅の祖師の著

7) 金富軾,「開城靈通寺大覺國師碑」, “辛巳春二月 上 以洪圓寺九祖堂成 請師熏修而落之 前世爲祖譜不一 今以 馬鳴 龍樹 天親 佛陀 光統 帝心 雲華 賢首 淸凉 爲九祖 師所定也.”

述を収録して、華嚴經<個別品や章>を解釈する章疏類の最後に配置したことでも明らかである。これは高麗の華厳祖師の著書を、中国のそれと対比して、最後に置いて差別化したもので、高麗の國家的正體性を明確にしたものと見ることができる。

以上、連番1-32番が<教門>であれば、33-77番までは華厳の<觀門>に該当する。杜順の法界觀をはじめ、いずれも觀門の理解と関連がある。<觀門>の分類基準を見ると、<疏鈔記科>など位階的基準、華嚴祖師の時代別の基準、新羅·高麗の著述等を基準とした。ここで提示された觀門は、法界觀·十門實相觀·還源觀·三昧觀·普賢觀·色空觀·華藏世界海觀·十門看法觀·妙理圓成觀·三聖圓融觀·五蘊觀·十二因緣觀など多様である。

章疏の連番78-135番は、華嚴經の個別品章の章疏の類聚に該当する。ここでも129-136までは智通から梵如など新羅撰述を区分して收錄している。最後に、136番以下の章疏は辭彙、禮讚、傳記類等に分類される。これらは、特に華嚴經と関連したもので、<論部>の後半部の<辭彙、傳記部>のそれと區別して收録している。これは、華嚴經章疏とともにこれと関連した辭彙、禮讚、傳記類を總括したわけである。結局、經典の理解と佛道の證得に進む效率的な方便門を提示したものと理解される。

III.『新編諸宗教藏總錄』と日本章疏目錄の華嚴章疏

『教蔵総録』に収録されている華厳章疏の収録現況を比較できる日本の章疏目録は、比較的多く傳存している。古代日本の章疏目録のうち、奈良時代のものとしては正倉院文書に經疏の目録が残っている。そして、こうした資料に基づいて、奈良時代の寫經の状況や經疏類の目錄復元が行われた[8)]。平安時代の目錄は、914

8) 石田茂作,『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』, 東洋文庫, 昭和5年 ; 平岡定海,「日本華嚴」の展開について (抄),『奈良佛教の展開』(東京: 雄山閣, 1994), pp.186-195 ; 山本幸男,「華嚴宗關係章疏目錄-勝宝錄·圓

年圓超撰の『華嚴宗章疏并因明錄』(以下、『圓超錄』)、925年筆写の『山王院藏』[9]、1094年永超撰の『東域傳燈目錄』(以下、『東域錄』)、1176年藏俊撰の『注進法相宗章疏』 などがある[10]。このうち、10世紀から11世紀頃、日本傳存華厳宗章疏の現狀は『圓超錄』と『東域錄』で見ることができる。『東域錄』は、諸目錄や各所の藏書を参考に編纂した当時の佛書目錄で、1090年に編纂された高麗の『教藏総録』より後の1094年に編纂されたもので、両国の章疏の現況と特徴を比較して見ることができる。

最近、日本の七寺藏章疏目錄が、新出資料として紹介されたことがある。この目錄は『七寺古逸經典研究叢書』に収録された現在の法金剛院藏の『大小乘經律論章疏目錄』、『古聖教目錄』(擬題)、『一切經論律章疏集(傳錄)幷私記』である。これら七寺の章疏目錄には、『奈良朝現在一切經目錄』や平安期以降の目錄にも載ってない章疏名が見え、また、この資料の発見によって、『東域錄』 が当時の日本に傳存する章疏の全体目錄ではないことが明らかになった。つまり、『一切經論律章疏集(傳錄)幷私記』と『古聖教目錄』の章疏目錄は『東域錄』の不備を補うとともに、新たな章疏名も相当数見え、平安時代後期の目録の規模を拡張するものと評価されている。

一方、12世紀以降の日本華厳章疏の現狀は、13世紀の華厳宗明惠に代表される高山寺の章疏目錄である『高山寺聖教目錄』(以下、『高山錄』)、また、東大寺凝然(1240-1321)の 『華嚴宗經論章疏目錄』 (以下、『凝然錄』)を参照することができる。『教藏總錄』 の撰者である高麗の義天は華厳九祖説を提唱したが、これは宋の淨源の華嚴七祖說と比較することができる[11]。本稿では、義天と淨源がともに重

超錄を中心に」,『相愛大学人文科学研究所研究年報』, 相愛大学人文科学研究所, 2009. 山本幸男は勝宝錄(751年)、圓超錄(914年)、永超錄(1094年)、凝然錄(1240-1321)、義天錄(1090)の5種の比較表を提示した.

9) 『山王院藏』は『昭和法寶總目錄』第3巻に収録されており、清蓮院藏本を底本としたものである. そのうち、華厳関連章疏は次の7部に止まっている. 華嚴宗問答 2卷, 華嚴經觀門骨目 1卷, 華嚴序注二本 2卷, 華嚴傳記 5卷, 華嚴文義綱目 1卷, 華嚴指歸 1卷, 華嚴經品出記 1卷である.

10) 入唐僧の將來目錄としては最澄の『傳教大師將來台州錄』、『傳教大師將來越州錄』、空海の『御請來目錄』などがある.

11) 吉田剛,「中国華厳の祖統説について」『華厳学論集』(東京: 大蔵出版株式会社, 1997) ; 金龍泰,「笑菴観復

視した華嚴祖師のうち、杜順·智儼·法藏·澄觀·宗密の華嚴章疏を中心に検討することとする。

1. 杜順 撰述 華嚴經 章疏

杜順(557-640)の華厳関連章疏は、7種が確認される。彼の著作に認められている『法界觀門』も眞撰かどうかが議論になっている[12)]。『教藏總錄』と日本の諸目錄で杜順の撰述章疏を整理すると、次の通りである。

〈表 1〉杜順 撰述 華嚴章疏

連番	章疏名	卷數	教藏總錄	圓超錄	東域錄	古聖錄	高山錄	凝然錄	備考
1	(大華嚴經)法界觀	1	○	○	○		○	○	
2	(大華嚴經)十門實相觀	1	○						
3	華嚴經五教分記	1		○	○			㊟	
4	華嚴五教止觀	1					○		
5	五教心觀	1						○	
6	會諸宗別見頌	1		○	○			㊟	
7	花嚴義口口圈	1				○			缺字

杜順の華厳関連の章疏は7種で、『教藏總錄』には2種、『圓超錄』と『東域錄』には3種が収録されている。このうち『法界觀』と『華嚴五教止觀』が伝えられている。『法界觀』は『法界觀門』であり、805年の『傳教大師將來越州錄』で確認される[13)]。国内外の傳存は確認されていないが、澄觀の『華嚴法界玄鏡』と宗密の『註華嚴法界觀門』で斷片を見つけることができ、房山石經(F.1083)は、『漩澓偈』1巻が杜順作と伝えている。『教藏總錄』に収録されている『十門實相觀』は現傳しないが、杜順說智儼撰の『華嚴一乘十玄門』1巻との相関性は、さらに検討する必要がある。

の華厳思想と祖統説」『印度学仏教学研究』102 (東京: 日本印度学仏教学会, 2003).

12) 最近の論議では第2回共同國際學術大會で張雪松の發表と中西俊英の討論がある. 張雪松,「法藏『華嚴三昧觀』研究」,『法藏과 동아시아 불교』, 2018, 東國大·中國人民大·中國民族大.

13) 木村清孝,『初期中國華嚴思想の研究』(東京: 春秋社, 1977), pp.328-370.

『圓超錄』と『東域錄』に収録されている『華嚴經五教分記』と『會諸宗別見頌』は13世紀の『凝然錄』の段階では非現行であった[14)]。『華嚴五教止觀』は高山寺に傳存し、『大正藏』に収録されている。これは、書名から見て『凝然錄』の『五教心觀』とその内容は類似したものと推定される。七寺藏『古聖錄』には『花嚴義口口圈』が収録されているが、完全な書名がわからない。11-14世紀の東アジア漢文仏教文化圏で杜順撰述の華厳章疏はいずれも7種の書名が確認され、同一書と推定される重複書の2種を除けば5種であるが、眞撰の與否など明確でない点が存在する。

2. 智儼 撰述 華嚴經 章疏

智儼(602-668)の著作は、法藏の『華嚴經傳記』によると20余部だったという。このうち華嚴經関連の章疏を『教藏總錄』と日本の諸目錄で分類して整理すると、以下の通りである。

〈表 2〉智儼 撰述 華嚴章疏

連番	章疏名	卷數	教藏總錄	圓超錄	東域錄	古聖錄	高山錄	凝然錄	備考
1	六相章	1	○				○	逸	
2	搜玄記	5	○	○	○	略稱	○	○	
3	十玄章	1	○	○	○		○	○	
4	要義問答	2	○	問答	問答	問答	五十	五十	
5	入法界品鈔	1	○			○		逸	
6	章門雜孔目	4	○	○	○	○	○	○	
7	華嚴供養十門儀式	1		○	○	○		逸	
8	花嚴疏	13		13					
9	華嚴經玄明要決	1		○	○	○		逸	
10	華嚴經十玄無果章	1						逸	
11	花嚴玄義章	1				○			

14) <表 1>『凝然錄』の逸は『凝然錄』に失傳に記録されているという意味である. 以下、表でも同じである.

智儼が撰述した華嚴經関連の章疏は11種が確認されており、『教藏總錄』には6種、日本の傳存目錄では5種を追加することができる。『搜玄記』、『孔目章』、『十玄章』、『華嚴經問答』の4種は全体目錄で確認され、全て現傳している。これ以外に『一乘法界圖』1卷の詩、『十句章』の「十句」があり、斷片の一部として知られた『入法界品鈔』卷などがある[15)]。『教蔵総録』の『六相章』、『入法界品鈔』は『東域錄』などでは確認できず、一方、『華嚴經供養十門儀式』、『華嚴經玄明要決』、『華嚴疏』、『華嚴經十玄無果章』は『教蔵総録』に収録されていない。

『花嚴疏』13卷は『圓超錄』のみ見つけられ、他の目錄にはない。『古聖錄』には、『華嚴疏』5卷があり、注記には「古本疏」とした。七寺の『大乘經律論疏記目錄』には『(華嚴經)略疏』5卷が収録されている。『華嚴經十玄無果章』は、『凝然錄』に失傳に収録されている[16)]。七寺藏『古聖錄』は、『圓超錄』以降『凝然錄』の段階までの多くの章疏が収録されて、章疏の紙數が記載されており、卷数の推定など新しい情報がわかり、今後も綿密な検討が要求される。ただ、『古聖錄』には轉寫の過程での誤寫と著者名が抜けている。そのうち、『花嚴一乘十玄門』が収録されており、『十玄章』と関連があると推定される。

『華嚴經要義問答』は『東域錄』には「同經問答二卷同上又云略疏」として、『華嚴經問答』は2卷で『略疏』と称したりもした。この書名について、『教藏總錄』では「世云五十要問答是」として同一書と見なし、『高山錄』と『凝然錄』には『華嚴經五十要問答』とあり、現在『大正藏』に収録されている。

3. 法藏 撰述 華嚴經 章疏

法藏(643-712)が撰述した華嚴經の關聯章疏は、諸章疏目錄に32種の書名を見つけられる。これらの法藏の著述は、比較的多数傳存するが、著作の眞僞の論議も

15) 木村清孝,「智厳の著作について」,『金澤文庫研究』22 (横浜: 金澤文庫, 1976) ;『初期中國華嚴思想の研究』; 石井公成,「『一乘十玄門』の諸問題」,『佛教學』12, 1981 ; 吉津宜英,『華嚴一乘思想の研究』(東京: 大東出版社, 1991), pp.31-37. 第2節「智儼の著作」; 全海住,『義湘華嚴思想史研究』(서울: 民族社, 1993), pp.45-49.

16) 凝然,『華嚴宗經論章疏目錄』(『大日本佛教全書』卷1, 仏書刊行会, 1913).

進めている[17]。『敎藏總錄』と日本の諸章疏目錄の華嚴經章疏を整理すると、次の通りである。

〈表 3〉法藏 撰述 華嚴章疏

連番	章疏名	卷數	敎藏總錄	圓超錄	東域錄	古聖錄	高山錄	凝然錄
1	(華嚴經)探玄記	20	○	○	○	○	○	○
2	(華嚴經)略疏	12	○					㊥
3	(華嚴經)還源觀	1	○				○	○
4	(華嚴經)三昧觀	1	○	○/菩提	○/菩提	菩提	○/菩提	菩提
5	(華嚴經)普賢觀	1	○				○	○
6	(華嚴經)色空觀	1	○					
7	(華嚴經)華藏世界海觀	1	○					○
8	(華嚴經)法界義海	2	○	○	○	-	義海百門	義海百門
9	(華嚴經)十玄章	1	○				○	
10	(華嚴經)敎義分齊	3	○	○	○	○	○	○
11	(華嚴經)綱目章	1	○	○	○	○	○	○
12	(華嚴經)指歸	1	○	○	○	○	○	○
13	(華嚴經)策林	1	○	-	-	-	○	○
14	(華嚴經)華嚴雜章門	1	○	玄義章	玄義章	-	華嚴章	-
15	(華嚴經)三寶別行記	1	○					㊥
16	(華嚴經)金師子章	1	○	○	○			○
17	(華嚴經)佛名	2	○	○	○			
18	(華嚴經)梵語	1	○	○	○			○
19	(華嚴經)音義	1	○	○	○			㊥
20	(華嚴經)傳記	5	○	○	○	○	○	○
21	寄海東華嚴大德書	1	○					○
22	華嚴經開脈	1	文超	關脈義	關脈義	關脈	開脈義	關脈義
23	華嚴問答	2	-	○	○		○	
24	花嚴三寶禮	1	三寶章	○	○	○	○	○
25	華嚴三敎對辨懸談	1	-	○	○		㊥	
26	華嚴遊心法界記	1	-	○	○		○	○
27	華嚴經纂靈記	1	5卷/慧苑				○	
28	花嚴疏	13	-			○		
29	華嚴唯識章	1	-	○	○			
30	華嚴讚禮	1		○	○	○		
31	華嚴八會章	1	-	○	○	○		
32	華嚴七處九會頌	1	-		○			

17) 吉津宜英,『華嚴一乘思想の研究』(東京: 大東出版社, 1991), pp.130-144.『華嚴策林』,『華嚴經問答』,『妄盡還源觀』,『金師子章』,『關脈義記』などを挙げている.

『教藏總錄』 には華嚴經部に21種の章疏が収録されており、そのうち、12種は『東域錄』 等と一致したり類似して日本の初期目錄に収録されていない章疏も多數確認される。華嚴教學の核心である『探玄記』、『教義分齊章』、『旨歸』、『綱目』などは兩國ともに傳存されているが、『教藏總錄』にある『華嚴經略疏』、『華嚴策林』、觀法類の一部は日本の目錄にはない。『華嚴經略疏』の現傳資料は見つからないが、『大正藏』 (T.2754)に撰者未詳の『華嚴略疏』卷第3「十地品初記」の1卷が傳存しており、これは大英博物館藏の燉煌本(S.2694)に該当する。さらに、燉煌寫本(北京本-0080)も一緒に比較検討する必要がある。

『華嚴策林』は日本の古目錄には傳存しないが、『大正藏』(T.1872)に収録されており、底本は『日本續藏經』 である。『日本續藏經』 の底本は未詳であるが、冊末の記録には「維時明治二十四年卯五月南山留學之際撿出此書於釋迦文院寶庫偶接悲母四不順之急報欲直下山看病乃祈平癒于三寶奉速寫畢南都唐招提寺末資五月十七日求律沙門智海(五夏)」とあり、明治24年5月に唐招提寺の智海が釋迦文院から求めて筆寫したものが、現傳する唯一本である。

『教藏總錄』の『華嚴經梵語』と『華嚴經音義』は「圓超錄」と「東域錄」には、『華嚴梵語及音義』が収録されている。また、『華嚴經佛名』は『東域錄』には、「同經中菩薩名三卷分為二部佛名二卷菩薩名一卷傳云右不知誰所集也鳩集闕界未能備盡令沙門賢首更廣其舊頗為詳悉云云」とあり、『佛名』2卷と『菩薩名』1卷で構成された合本である。

『華嚴傳』は集者がわからず、法藏が增廣したことが記録されているが現傳せず、その内容はわからない。また、『教藏總錄』 に収録されていない章疏のうち、『古聖錄』の『華嚴七處九會頌』は法藏撰と記録されており、『大正藏』第36冊(T.1738)の『新譯華嚴經七處九會頌釋章』一卷は澄觀の撰述である。

一方、『關脈義』、『華嚴問答』などは『教藏總錄』に見えず、編纂者の問題と関連してさらに検討が要求される。『華嚴關脈義』は『教藏總錄』には「開脈一卷已上文超述」と収録されており、法藏の眞撰とするかどうかは、議論がなされている。七寺『古聖錄』には、法藏撰に『花嚴闕(關)脈義記』、『花嚴關脈』が収録されてお

り、追加の検討が必要である。『大乘經律論疏記』にも『闕脈義記』といって、ほとんど「闕脈」に記述されており、撰者も法藏である。『華嚴關脈義記』一卷は『大正藏』第45冊に収録されており、その底本は鎌倉時代凝然の寫本で、小野玄妙氏藏本と記録されている。卷末記錄に「寫本云 永仁五年(丁酉)暮春三月五日 於東寺戒壇院 爲實圓比丘書寫之 華嚴宗沙門 凝然 春秋五十八」とあり、凝然が永仁５年(1297)に東大寺戒壇院で書写したものである。加えて、燉煌本佛蘭西國民圖書館藏本(『大正藏』卷45、1879a)があり、金澤文庫に湛睿が書寫した『華嚴經關脈義記』が現傳する[18)]。

『教藏總錄』の『華嚴經三昧觀』に関する章疏では、『圓超錄』の『花嚴三昧觀』と『花嚴發菩提心義』、『東域錄』の『華嚴三昧觀』と『華嚴發菩提心章』がある。『高山錄』には、『華嚴三昧章』と『華嚴經發菩提心章』、『古聖錄』には、『花嚴發菩提心義』1卷本と2卷本が区分されて収録されている。『凝然錄』には、『華嚴經發菩提心章』だけが収録されており、それらの相関性についての議論は展開されている[19)]。『華嚴經三昧觀』は傳存していないが、『華嚴三昧章』は高山寺所藏の宋刊本、東大寺所藏の凝然写本(永仁5年、1297)があり、『華嚴發菩提心章』は金澤文庫所藏の鎌倉時期筆写本が現傳する。

『教藏總錄』の『華嚴雜章門』の註記には三寶章･流轉章･法界緣起章･圓音章･法身章･十世章･玄義章が記録されている。日本の東大寺に残っている天平勝寶3年(751)の「華嚴宗布施法定文案」の章疏目錄には法藏の撰述で『玄義章』をはじめ、『華嚴關脈義記』、『華嚴遊心法界記』、『華嚴發菩提心義』などが収録されている[20)]。その他『東域錄』では『華嚴一乘法界圖』、『古聖錄』の『花嚴入法界玄義抄』

---

18) 崔鉛植,「文超の著述と元曉思想受容の再檢討」『東アジア仏教研究』11, 2013 ; 李慧英は闕脈義記などが749年を前後して書写されたものと見ている (李惠英,『慧苑撰『續華嚴經略疏刊定記』の基礎的研究』(京都: 同朋舍, 2000), pp.97-100.

19) 木村清孝, 前掲書, pp.355-361 ; 陳永裕,『華嚴觀法の基礎的研究』(서울: 民昌文化史, 1995) ; 鈴木宗忠,『原始華嚴哲學の研究』(東京: 大東出版社, 1934) ; 吉津宜英, 前掲書, p.146.

20)『大日本古文書 編年文書』第11卷, pp.557-562 ; 石田茂作,『寫經よりみたる奈良朝佛教の研究』, 東洋文庫, 1930 ; 金天鶴,「『華厳十玄義私記』所引の『三宝章』の意義 －称名寺所藏「十玄章」の発見を契機に」,『佛教學研究』53 (서울: 佛教學研究會, 2017).

などを法藏撰に記述しており、注意が必要である。

以上を要約すると、法藏の華厳章疏は『敎藏總錄』収録章疏21部のうち、12種だけが『東域錄』等の初期目錄に確認され、日本の章疏目錄を通じて追加できる法藏の華嚴章疏は11種と把握できる。結局、11-13世紀頃の東アジア仏教界において法藏の華嚴經関連の章疏は、約32種が眞撰の如何を離れて傳存されていたことがわかる。

4. 澄觀 撰述 華嚴經 章疏

澄觀の著作は各種目錄や文類を整理すると38種にのぼる[21)]。このうち、華厳章疏は『敎藏總錄』に収録されているのが16部、『東域錄』が5部であり、その他の目錄の資料を整理すると、次の通りである。

〈表 4〉澄觀 撰述 華嚴章疏

連番	章疏名	卷數	敎藏總錄	圓超錄	東域錄	古聖錄	高山錄	凝然錄	備考
1	(華嚴經)疏	20	○	㉚	㉚	-	○	⑫⓪	
2	(華嚴經)科	7	○					逸	
3	(華嚴經)隨疏演義鈔	40	○	-	㉚	-	㊵/⑥⓪	○	
4	(華嚴經)貞元疏	10	○				○	○	
5	(華嚴經)法界玄鏡	1	○	○	○	○	○	○	
6	(華嚴經)三聖圓融觀	1	○					○	
7	(華嚴經)五蘊觀	1	○					○	
8	(華嚴經)十二因緣觀	1	○					○	
9	(華嚴經)了義	1	○					逸	
10	(華嚴經)心要	1	○					○	
11	(華嚴經)略策	1	○				○	○	
12	(華嚴經)綱要	3	○				○	○	
13	(華嚴經)三品別行疏	2	○					逸	
14	(華嚴經)三品隨疏演義鈔	6	○						
15	(華嚴經)行願品別行疏	1	○	○	○	-	○	-	
16	(華嚴經)發菩提心戒本	1	○	-	○			逸	
17	華嚴入法界十八問答	1	-				○	○	

21) 鎌田茂雄,『中國華嚴思想史の研究』(東京:東京大學出版會, 1970), pp.191-220.

上の<表4>澄觀撰述の華嚴章疏では『東域錄』と『圓超錄』には『華嚴經法界觀玄鏡』、『華嚴普賢行願品疏』、『華嚴隨疏演義鈔』、『華嚴經疏』、『華嚴受菩提心戒』、『古聖錄』には『花嚴法界觀』が確認される。『華嚴經疏』は高麗時代の原刊本をはじめ、日本の傳本は13世紀の筆写本が東大寺、高山寺、金澤文庫に残されている。

『行願品別行疏』は高麗本が国立中央博物館、日本の傳本は東大寺、金澤文庫などに傳存している。東大寺本は宋乾道癸巳年(1173)の原識語があり、「此疏一卷有圭峯禪師所述義記六卷及科文一冊以讚釋之自縉雲移疏注經及削成略抄〇〇疏科記傳者尠」とあり[22)]、義記六卷及科文一冊で讚釋されたものであることがわかる。傳本の系統は、さらに検討する必要がある。

『華嚴隨疏演義鈔』と関連して、『敎藏總錄』には「或開爲六十卷徑山寫本八十卷」とあり、巻数は40卷であるが、他に60巻本があり、徑山寫本は80卷本である。『東域錄』には『華嚴隨疏演義鈔』の30卷に「珍錄之中先舉二十卷疏別載之可詳若先後合有六十軸歟分本末故可八十近來依東寺華嚴宗傳云觀先作新經本疏十卷次作隨疏演義鈔二十卷各分本末成六十卷後作四十經疏十卷都有七十卷文疏云云」とあり巻数に加減がある。『大正藏』(T.1735)に収録されている『大方廣佛華嚴經疏』は60卷であり、その底本は增上寺報恩藏明本、甲本は德川時代刊今津洪嶽氏藏本、乙本は正慶元年刊小野玄妙氏藏本を活用したものである。

『華嚴隨疏演義鈔』 は、敎藏都監で1094年から1097年までの3年にわたって刊行された原刊本が日本の東大寺に現傳し、これを筆写した康和5年(1103)の筆寫本が傳存しており、金澤文庫には13-14世紀の筆写本が残っている。

『貞元疏』 は敎藏都監で刊行した原刊本で、卷10の1卷が日本の大東急文庫に現傳し、東大寺には嘉祿3年(1227)、文應元年(1260)の筆寫本が傳わり、その他、金澤文庫には文永元年(1264)の筆写本が確認される。これを見ると、『華嚴隨疏演義鈔』は日本に傳來されながら筆寫され、『貞元疏』も13-14世紀に活用されたことがわかる。

---

22) 大屋德城,『寧楽刊経史』. 附図 59 (京都: 内外出版, 1923).

『十二因緣觀』は金澤文庫に所蔵されており、最近、新羅撰述の可能性が提起されている[23)]。また、『教藏總錄』に収録された澄觀の『華嚴經疏』を淨源が経文の下に注した『大疏注經』120巻など、宋と遼の章疏は11-12世紀の日本の傳存目錄には全く反映されず、伝来されていないか、流通が制限されていたと推測できる。澄觀撰述の華厳章疏の大蔵経入蔵と系統については次章で検討する。

5. 宗密 撰述 華嚴經 章疏

宗密撰述の華嚴經關聯章疏は『教藏総禄』に7種、13世紀、日本の目錄に確認される３種が見出される。これを整理すると＜表5＞のとおりである。

〈表 5〉宗密 撰述 華嚴章疏

連番	章疏名	卷數	教藏總錄	圓超錄	東域錄	古聖錄	高山錄	凝然錄	備考
1	綸貫	15	○					逸	
2	注法界觀門	1	○				○	○	
3	隨疏義記	6	○				○	○	
4	又隨疏記義	4	○						
5	又記義	3	○					逸	
6	釋義鈔	5	○					逸	宗密述 仲希治
7	修門人書	1	○						
8	同別行疏科文	1	-				○	逸	
9	同疏義記	2	-					逸	
10	同科文記	1	-					逸	

『教藏總錄』に収録されている宗密の章疏は、10世紀の日本章疏目錄では確認されておらず、傳來やその活用は疑問である。『注法界觀門』は『凝然錄』と『高山錄』で確認され、書名は『註法界觀』である。日本の諸目錄でわかる宗密が撰述した華厳関連の章疏は、『高山錄』が編纂された以後の目錄で確認される。『凝然錄』には『行願疏義記』6卷、『同疏科』1卷、『行願品別行疏』1卷の3種は現傳であり、6種は失傳と記録している。『行願品別行疏』1卷は 「宗密將疏注經卽成二卷」とあり、宗

23) 佐藤厚,「澄觀撰『十二因緣觀』の著者問題」『南都佛教』86 (奈良: 東大寺, 2005).

密が澄觀の疏文を經文の下に配對して作成したもので、現傳本は見つけられない。失傳された章疏目錄に収録された『同經行願別行疏隨疏義記』3卷の註記には「六卷之記外在之」とあり、3卷本『隨疏義記』を記録しているが、同一章疏名では確認されていない。これは、『教藏総禄』に収録されている『隨疏記義』や『記義』との関連性が推定されるが、明らかではない。

宗密の著述は、澄觀の『普賢行願品別行疏』を註釋したものが多数であり、般若譯『華嚴經』の注釈書に該当する。別添<資料1>の連番116から122番までは、澄觀の『普賢行願品別行疏』に関連するものである。この章疏は『教藏總錄』に記述されたものと同一の書名では確認されていないが、『行願品別行疏隨疏義記』6卷は『新纂卍續藏』(X.0229)に収録された『大方廣佛華嚴經普賢行願品別行疏鈔』6卷と関連があるものと推定される。

鎌田茂雄氏は、宗密の『普賢行願品』に関する章疏について、『教藏總錄』に収録されたものとして 「隨疏義記六卷科一卷、釋義鈔四卷科一卷(宗密述仲希治定)」だけを提示している。これに加えて「又隨疏記義三卷科一卷、又記義二卷科一卷已上宗密述」の2種を追加して補充する必要がある。宗密の『普賢行願品』に関する章疏は、『教藏總錄』と日本の諸目錄に収録されている章疏名や卷數が同じではない。その同異や先後に関する問題は、さらに追究する必要がある。

Ⅳ. 華嚴章疏の傳承と系統：澄觀撰述の大藏經入藏と系統を中心として

本稿では、以上で検討した『教藏總錄』と日本の諸目錄に収録されている華嚴經章疏の中で、初めて大藏經に入藏された澄觀の華嚴章疏を中心に検討する。中国の場合、11-12世紀に『教藏總錄』のような章疏目錄は現傳していない。ただし、大藏經に入藏された章疏類が散見されるだけである華厳章疏がそれに入藏された時期は、宋代であり、『開寶藏』の續藏に入藏された澄觀撰著類がそれである。『開

寶藏』には多數の章疏が入藏され、その覆刻の『趙城藏』にも収録されているが、華厳章疏は一部にとどまっている。『開寶藏』及び『趙城藏』に収録されている華嚴章疏類は、澄觀撰著類、志寧が編纂した『大方廣佛華嚴經合論』が収録されている。澄觀撰著類は『大方廣佛華嚴經疏』40卷(以下、『華嚴經疏』)、『大方廣佛華嚴經疏科』20卷、『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』60卷(以下、『華嚴經隨疏演義鈔』)の3種120卷である。このうち、『華嚴經疏』と『華嚴經隨疏演義鈔』を対象に、大藏經の入藏や系統を検討する。

澄觀の『華嚴經疏』及び『華嚴經隨疏演義鈔』については、上記の<表4>澄觀撰述の華厳章疏で説明したように、『敎藏總錄』ではそれぞれの卷数について20卷と40卷と記録されている。これに対して『圓超錄』と『東域錄』は30卷と記録されており、高麗傳本と日本傳本の底本と系統が違うことが想定できる。以下では、大藏經をはじめとする諸章疏目錄に収録された『華嚴經疏』と『華嚴經隨疏演義鈔』の卷數や行字數などを通じて系統を検討する。次の<表６>は、澄觀の撰述である『華嚴經疏』と『華嚴經隨疏演義鈔』の卷數を含む大藏経の入藏現況である。

〈表 6〉『華嚴經疏』と『華嚴經隨疏演義鈔』の入藏と系統

區分	華嚴經疏			華嚴經隨疏演義鈔		
	卷數	函次/底本	行字數	卷數	函次/底本	行字數
敎藏總錄	20	未詳	30行 20字	40	遼本	30行20字
清涼傳	未詳	未詳		40	未詳(787年)	
圓珍錄	20	未詳		40	未詳	
圓超錄	30	未詳		30	未詳	
東域錄	30	未詳		30	未詳	
開寶藏	未詳	未詳		未詳	未詳	
趙城金藏	40	池-洞	26行20字	60	池-洞	26行20字
高麗藏	-	非入藏		-	非入藏	
至元錄	40	洞-遠		60	邈-治	
洪武南藏	40	本-務	30行 17字	60	稼-藝	30行 17字
永樂南藏	40	頗-最	30行 17字	60	精-丹	30行 17字
永樂北藏	60	用-威	25行 17字	90	沙-禹	25行 17字
嘉興藏	60	用-威	10行20字(半)	90	沙-禹	10行20字(半)
乾隆藏	80	困-牧 疏鈔會本	1行 16字	80	困-牧 疏鈔會本	1行 16字

縮刷藏	60	歲-歲 徑山藏 底本		90	歲-歲 徑山藏 底本	
卍正藏	60	第33-34套		90	第34套/藏經書院版	
大正藏	60	增上寺報恩藏明本		90	明崇禎年中刊增上寺 報恩藏本	

澄觀の『華嚴經疏』は貞元3年(787)に完成された。『華嚴經隨疏演義鈔』は『華嚴經疏』の完成以後、僧叡などのために撰述したものである[24)]。澄觀は貞元12年(796)から般若の譯場で『貞元新譯華嚴經』の翻訳に参加したことから『華嚴經隨疏演義鈔』は787年から796年の間に編纂されたものと推定されるが、その時期は特定できない。また、兩書の卷數も各々20卷と40卷であったと推定される。『敎藏總錄』に収録されている兩書は高麗時代の原刊本が傳存するが、『華嚴經疏』は京畿道博物館に所蔵されており、『華嚴經隨疏演義鈔』は東大寺に傳存している。京畿道博物館藏の原刊後刷本の『華嚴經疏』は卷第1の零本であり、1張は30行20字である。本書の卷數を調べてみると、每張の最後には「花嚴疏一上」という略書名と張次がある。また、『敎藏總錄』には「疏二十卷或開為四十卷」とあり、40卷本があったことがわかる。『開寶藏』の復刻である『趙城藏』本は40卷、行字數は26行20字であり、明代以後、大藏經入藏本は主に60卷本である。

東大寺藏 『華嚴經隨疏演義鈔』は、敎藏都監の原刊本40卷の完本が傳存し、1張の行字數は『華嚴經疏』のように30行20字である。本書の每張の末尾には「花嚴抄一上」という略書名と張次がある。20卷が上下に分卷され、物理的には40卷であるが、書誌的卷數は20卷である。『敎藏總錄』は、卷數について 「隨疏演義鈔四十卷或開為六十卷徑山寫本八十卷」とあり、物理的卷數を採用したことがわかる。これ以外に、60卷本と徑山寫本の80卷本の別の系統があったことがわかる。趙城藏本の60卷本は26行20字であり、中国での歷代大藏經に入藏されたのは、永樂北藏本の以後、主に90卷本の系統が傳承されている。

24) 裴休,「清涼國師傳」,『玉岑山慧因高麗華嚴教寺志』卷8, “德宗建中四年 下筆著疏 (中略) 每慨舊疏未盡經旨 唯賢首國師頗涉淵源 遂宗承之製疏 凡歷四年而文成 (中略) 又為僧叡等著 隨疏演義四十卷 隨文手鏡一百卷 貞元十二年 上遣河東節度使 禮部尚書李詵備禮 迎觀入京.”

一方、日本において『華嚴經疏』と『華嚴經隨疏演義鈔』の傳承は圓仁の『入唐新求聖教目錄』に「華嚴經疏二十卷澄觀法師作」とあり、847年に20卷本が傳來されたことがわかる。また、天安3年(859)の『日本國上都比叡山延曆寺比丘圓珍入唐求法總目錄』に「大方廣佛花嚴經疏二十卷觀公、大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔四十卷觀公」とあり、859年に圓珍の將來本卷數はそれぞれ20卷と40卷本であり、「教藏總錄』本の卷數と同じである[25]。日本の傳本の中で、859年の『圓珍錄』とは異なり、『圓超錄』と『東域錄』には30卷本が記録されている。また、『華嚴經隨疏演義鈔』も『圓珍錄』には40卷本が収録されており、『圓超錄』と『東域錄』の30卷本と違いがある。

『圓超錄』には「華嚴疏三十卷」[26]が収録されており、『東域錄』には「華嚴疏三十卷、華嚴隨疏演義鈔三十卷」[27]が収録されているが、いずれも30卷本の傳本系統が明らかではない。『圓超錄』以前には、30卷本の『華嚴經疏』は見つからないが、「華嚴疏三十卷」の註記には「新經分本末為六十卷請來錄云演義鈔四十卷清涼山大華嚴寺澄觀述」と記録されている。『東域錄』は兩疏を区別しているが、「同經疏三十卷云演義新經」とあり『圓超錄』の卷數を踏襲したものと見られる。以降、日本の章疏目錄で30卷本の『華嚴經疏』は確認されていない。

『高山錄』 には20卷本の『華嚴經疏』、40卷本と60卷本の『華嚴經隨疏演義鈔』が確認されている。『華嚴經疏』は高山寺舊藏の宋刊本(1145-1146、紹興15-16年刊本)殘缺14卷(卷第1-5、7-9、11、18、20、22、29-30)が靜嘉堂文庫に所藏されており、高山寺には卷20が所藏されて傳存する。靜嘉堂藏本の卷20は『大正藏』收錄本の卷30に対応し、卷30は『大正藏』本の卷45に当たるため、全体の卷數を比較すると宋刊本は40卷本であることがわかる。

---

25) 竺沙雅章,『宋元佛教文化史研究』(東京: 汲古書院, 2000), pp.123-151. 遼刊『華嚴經隨疏演義鈔』の流通を中心に傳本系統を詳しく分析した.

26) 『華嚴宗章疏并因明錄』(『大正藏』55, p.1133上), "華嚴疏三十卷 新經 分本末為六十卷 請來錄云演義鈔四十卷 清涼山大華嚴寺澄觀述."

27) 『東域傳燈目錄』(『大正藏』55, p.1146中), "同經疏三十卷(云演義新經 清涼山大華嚴寺般若院澄觀師撰 分本末成六十軸 八十四十兩部合有七十卷 八十經疏分本末有六十卷 三十經疏更有十卷云云) (中略) 華嚴隨疏演義鈔三十卷(觀公 珍錄之中 先舉二十卷疏 別載之 可詳 若先後合有六十軸歟 分本末故可八十 近來依東大寺華嚴宗傳云 觀先作新經本疏十卷 次作隨疏演義鈔二十卷 各分本末成六十卷 後作四十經疏十卷 都有七十卷文疏云云)."

以上を総合すると、『華嚴經疏』は20卷本、40卷本、60卷本があり、『圓超錄』の記録を認めれば、30卷本を追加することができる。これを中国の地域別に見ると、中原系の唐本20卷と趙城金藏本40卷、北方系の遼本20卷、南方系の明藏本60卷の3つに区分できる。高麗では中原と北方の遼本系統を含めた2種が中心となり、日本では大藏經の入藏分を含めると3種が傳存されて活用されていたことがわかる。

『華嚴經隨疏演義鈔』は澄觀の傳記によると、撰述時の卷数は40卷であり、『敎藏總錄』にも40卷本が収録されていた。しかし、『東域錄』には「華嚴隨疏演義鈔三十卷」とあり、その傳本系統が明らかでなく、また、日本の章疏目錄にも30卷本は見つけられない。ただ、『敎藏總錄』では、40卷本以外に60卷本と徑山寫本80卷本があったことがわかる。このうち、60卷本は分卷しなければ30卷本になるので、當時に流行した60卷本と30卷本には関連があることが推測できる。

一方、義天と関連する記録では、『華嚴經隨疏演義鈔』が3本あったことがわかる。東福寺の栗棘庵藏本の卷4の識語に「學徒高麗國弘眞祐世僧統釋煦依晉水本講慈旨將唐朝演義鈔三本四十卷者奉命重校」[28]とあり、当時3本の『演義鈔』があり、これを校本として40卷本を重校した。つまり、40卷、60卷、80卷の3本は、40卷本刊行のための校訂であった。高麗傳本のうち、60卷と80卷本は確認されていない。日本の章疏目錄でも『東域錄』以降、30卷本は確認されていない。『高山錄』では40卷本と60卷本が全て収録されており、『凝然錄』には40卷本だけを記録している。

『華嚴經隨疏演義鈔』の現傳本では、東大寺所藏の原刊本以外に多數の刊寫本が確認されている。東大寺藏本は卷第1(上・下)から卷20(上・下)までの原刊本で、大安10年(1094、宣宗11年)から壽昌3年(1097、肅宗2年)にわたって高麗の興王寺で刊行されたものである。東大寺にはこの原刊本の古寫本が多数あり、その輸入と流傳がわかる。この古寫本は康和5年、康和6年、長治元年(1104)などとその他の

28) 大屋德城,『高麗續藏雕造攷』(京都: 便利堂, 1936), p.126 再引用.

同時期と推定される墨書のない23帖がある[29]。また、『高麗續藏雕造攷』に収録されている長治元年、康和5年(1103)の筆写本も原刊本の轉寫に該当する。さらに、東大寺にはこの原刊本を底本とした正慶元年(1332)の重刊本が確認される[30]。これらの東大寺諸本が高麗本の傳來と近い時期のものであれば、金澤文庫には鎌倉時期の筆寫本、南北朝-室町時期の筆寫本、文永5年の筆寫本などが多数確認されている。

一方、日本傳存本のうち、宋刊60卷本の傳來がわかるのが東福寺の栗棘庵藏本である[31]。その識語には前後に30卷ずつ「再寫重刊」したとあり、前の30卷は嘉定戊寅(1218)8月に造成され、後の30卷は壬午年(1222)3月に完成したと記述している。栗棘庵藏の60卷本は、1222年に南宋の慧因院で刊行されたものである。『高山錄』には、40卷本と60卷本が入錄されている。この『高山錄』は、建長2年(1250)に後嵯峨院(1220-1271)の命によって義淵上人靈典(1180-1255)が撰進したものである。また、書寫には唐代から鎌倉初期にかけてのものがあり、宋版も多数ある。したがって、栗棘庵藏の60卷本と同じ系統の60卷本が高山寺に收藏されていた可能性も十分ある。

以上の内容を要約すると、日本の『華嚴經隨疏演義鈔』の伝承は『東域錄』段階の30卷本、11世紀の敎藏都監の原刊本である東大寺所藏の40卷本、13世紀栗棘庵藏の南宋刊行60卷本が流通されていた。以降、『凝然錄』によると、主に40卷本が東大寺を中心に流通され、東大寺と金澤文庫に筆寫本として残されている。近代日本の『縮刷藏』などは、いずれも90卷本に明代徑山藏を活用したものである。

---

29) 大屋德城,『寧樂刊經史』(京都: 內外出版, 1923), pp.50-53 ; 東大寺圖書館編,「東大寺圖書館藏貴重書寫眞帳目錄(1)」『南都佛敎』87 (奈良: 東大寺圖書館, 2006), p.8 ; 同編,『南都佛敎』88 (奈良: 東大寺圖書館, 2007), p.2.

30) 大屋德城,『高麗續藏雕造攷』(京都: 便利堂, 1936), pp.70-71.

31) 大屋德城,『高麗續藏雕造攷』(京都: 便利堂, 1936), pp.125-132.

V. おわりに

本稿は、高麗大蔵研究所が主管して東国大学の協力によって研究されている「高麗教藏の結集とDB化プロジェクト」の一環で、2012年から2018年現在まで遂行した調査および研究に基づいたものである。以上の内容を要約することで結論の代わりとする。

『新編諸宗教藏総録』に収録されている華厳章疏の傳存の現況を見ると、全體177部のうち、大略68部が刊･寫本の形態で傳存され、1090年當時の華嚴章疏は現在、約38％が韓国をはじめとする東アジア仏教界に残っている。教藏都監から刊行された華嚴宗章疏の現傳資料を見ると、原刊本である日本東大寺藏の澄觀の『大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔』、大東急文庫所藏の澄觀の『貞元新譯華嚴經疏』など50種が確認できる。『教藏總錄』の章疏分類の特徵を見ると、『教藏總錄』の編纂と刊行は佛道の證得をはじめとする護法と関連があるが、それに至る方便は<經-論-疏鈔記科>という位階、華嚴祖師の時代順配列、新羅や遼の著述を區分して收錄したことにその特徵がある。

『教藏総録』と同時代の章疏目錄として、914年に編纂された『華嚴章疏幷因明録』、1094年の『東域傳燈目録』、平安時代の古寫本『古聖教目録』、12世紀以降、日本華厳章疏では『高山寺聖教目錄』、『華嚴宗經論章疏目錄』を比較した。杜順の華厳関連の章疏は7種で『教藏總錄』に2種、『圓超錄』と『東域錄』には3種が收録されているなど、5種が確認されているが、章疏名や眞撰の與否は議論になっている。智儼が撰述した華嚴經関連の章疏は11種が確認され、『教藏總錄』には6種、日本傳存目録では5種を追加することができる。法藏の撰述は『教藏總錄』で收録された21部のうち、12種だけが『東域錄』などの初期の目録に確認され、日本の章疏目錄を通じて追加できる法藏の華嚴章疏は11種と把握できる。澄觀が撰述した華厳章疏は、『教藏總錄』に收録されているものが16種、日本の目録から追加できるものが1種で、17部が確認できる。このうち11種は『東域錄』の段階では收録されておらず、伝来や活用與否は明らかでない。宗密撰述の華嚴經關聯の章疏は『教藏

総禄』に7種、13世紀の日本の目録には2種が見出せる。『教藏總錄』に収録された澄觀と宗密の章疏は、10世紀の日本章疏目錄では確認されておらず、伝来やその活用はさらに検討する必要がある。

次は、華厳の章疏の伝承と系統を知るための試論として、澄觀撰述の『華嚴經疏』と『華嚴經隨疏演義鈔』の大藏經入藏や系統について検討した。『華嚴經疏』の巻別系統は、20巻本、40巻本、60巻本があり、『圓超錄』の記録を認めれば、30巻本を追加できる。これを中国の地域別に系統を区分すると、中原系の唐本20巻・趙城金藏40巻、北方系の遼本20巻、南方系の明藏本60巻などで3つに分けられ、高麗では、中原と北方の遼本系統を含めた2種が中心となった。日本では大藏経の入藏分を含めると、3種が傳存されて活用されたことがわかる。

日本において『華嚴經隨疏演義鈔』は、『東域錄』段階の30巻本、原刊本である東大寺所藏の40巻本、13世紀栗棘庵藏の南宋刊60巻本が流通されていた。以降『凝然錄』によると、主に40巻本が東大寺を中心に流通されたもので、現傳本が東大寺と金澤文庫に筆写本として残されている。近代日本の活字本である『縮刷藏』などはすべて、90巻本で明代の徑山藏を活用したものである。

以上、本稿では東アジア仏教界の華嚴章疏だけを検討した。今後、11-12世紀の東アジア仏教章疏の現況や交流現狀を整理するために義天の『教藏總錄』を中心に、国内外に散在している章疏の総合的な整理が必要である。このため、国内外の章疏の目錄を正確に作成して整理する一方、刊記、奥書など書誌を総合的に整理する基礎作業も優先して行う必要がある。さらに、現存する章疏の比較を通じた底本と系統の確認も要求される。これについては、別の研究で進めていくつもりである。

〈資料 1〉『敎藏總錄』に収録された華嚴經章疏

連番	現傳章疏名	著者	卷數	諸種 漢文大藏經收錄 現況 (其他 刊·寫本 包含)
1	疏十卷	慧光(世稱光緣)述	10	
2	又略疏四卷	慧光(世稱光緣)述	4	大正/
3	疏八卷(或四卷)(慧遠述辯相續修)	慧遠述	8	
4	疏二十二卷	智正述	22	
5	搜玄記五卷	智儼述	5	高麗/大正/卍續/
6	探玄記二十卷	法藏述	20	高麗/大正/卍續/
7	略疏十二卷	法藏述	12	大正/敦煌寫本
8	刊定記二十卷	慧苑述	20	卍續/
9	刊定記纂釋二十一卷(或十三卷)(法詵創造正覺再修)	法詵創造	21	
10	疏二十卷(本十九卷今開第二)	宗一述	20	
11	疏三十一卷	法銑述	31	圓宗文類(法銑序)
12	疏三十卷	神秀述	30	
13	疏二十卷(或開爲四十卷)	澄觀述	20	至元錄/洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/卍續/
14	科七卷	澄觀述	7	佛教大/中華/卍續/
15	科二十卷大科一卷	善來排定	21	
16	隨疏演義鈔四十卷(或開爲六十卷徑山寫本八十卷)	澄觀述	40	趙城金/至元錄//洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/卍續/
17	演義集玄記六卷	道弼述	6	
18	演義逐難科一卷	道弼述	1	
19	玄談鈔逐難科一卷	思孝述	1	
20	貞元疏十卷	澄觀述	10	卍續/
21	科三卷大科一卷	智昭述	4	
22	綸貫十五卷	宗密述	15	
23	疏十卷(本是八卷今開第五卷幷宗要均作十卷也)	元曉述	10	大正/
24	古跡記十卷(或五卷)	太賢述	10	
25	略注經一百卷(賢昱略淸涼大疏注於經下)	賢昱略	100	
26	大疏注經一百二十卷 (淨源移淸涼大疏注於經下)	淨源移	120	洪武南/卍續/
27	科二十卷	淨源刊定	20	洪武南/卍續/
28	論一百卷	靈辨述	100	至元錄/卍續/
29	論四十卷	李通玄述	40	毘盧/趙城金/高麗/嘉興/乾隆/縮刻/大正/佛教大/中華/卍續/

連番	現傳章疏名	著者	卷數	諸種 漢文大藏經收錄 現況 (其他 刊·寫本 包含)
30	合論一百二十卷(志寧將通玄論注於經下)	志寧	120	毘盧/趙城金/高麗/嘉興/乾隆/縮刻/
31	合論音義十二卷	恒遂集	12	
32	大不思議論一百卷(前分四十卷流通訖餘未見)德素述	德素述	100	
33	法界觀一卷(旋復頌附)	法順(杜順)述	1	房山(漩復偈)/大正(華嚴法界玄鏡)
34	法界玄鏡一卷	澄觀述	1	洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
35	玄鏡議記二卷科一卷	德素述	3	
36	注法界觀門一卷	宗密注	1	毘盧/洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
37	鈔四卷科一卷	守眞述	5	
38	集要鈔三卷	從朗述	3	圓宗文類(法界觀門鈔序)
39	集解五卷	有朋述	5	圓宗文類(曇雅, 法界觀門鈔序)
40	鈔四卷科一卷	洪鑑述	5	
41	助脩記二卷科一卷	淨源述	3	圓宗文類(法界觀助修記序)
42	符眞鈔四卷	元智述	4	
43	摭要鈔四卷	遵式述	4	淸凉寺 斷簡
44	釋旋復頌一卷	椎勁述	1	房山石經
45	略法界觀手記一卷	有誠述	1	
46	三觀宗記一卷	有誠述	1	
47	新注法界觀一卷	呂氏注	1	圓宗文類(新注法界觀序)
48	疏通敎觀十門論一卷	曇雅述	1	
49	法界十大觀論一卷	曇雅述	1	
50	釋起入法界觀四法明門一卷	曇雅述	1	
51	一相觀門三根判位章一卷	曇雅述	1	
52	普觀諸法相卽在入不思議門論一卷	曇雅述	1	
53	心佛道交論一卷	曇雅述	1	
54	十門實相觀一卷	杜順述	1	
55	還源觀一卷	法藏述	1	永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
56	疏鈔補解一卷科一卷	淨源述	2	卍續/
57	義綱一卷	可歸述	1	
58	三昧觀一卷	法藏述	1	高山寺/東大寺
59	普賢觀一卷	法藏述	1	卍續/
60	色空觀一卷	法藏述	1	
61	華藏世界海觀一卷	法藏述	1	
62	華藏世界海主伴圖敘一卷	回濟述	1	

連番	現傳章疏名	著者	卷數	諸種 漢文大藏經收錄 現況 (其他 刊·寫本 包含)
63	華藏世界海圖一卷	處恒述	1	圓宗文類(毗盧遮那佛華藏世界圖讚>
64	法界義海二卷(或一卷)	法藏述	2	大正/
65	科一卷	淨源述	1	
66	十門看法觀一卷	義想述	1	
67	刊定別章二卷	慧苑述	2	
68	妙理圓成觀三卷	神秀述	3	
69	三聖圓融觀一卷	澄觀述	1	大正/卍續/
70	五蘊觀一卷	澄觀述	1	卍續/
71	十二因緣觀一卷	澄觀述	1	金澤文庫
72	了義一卷(食肉有罪無罪附)	澄觀述	1	
73	心要一卷	澄觀述	1	卍續/
74	注一卷	通義述	1	
75	自防遺忘集十卷	文超述	10	金澤文庫
76	開脈一卷	文超述	1	金澤文庫
77	法界圖一卷	義想述	1	大正/卍續/
78	指歸兩卷	佛陀三藏述	2	金澤文庫
79	廣釋義章一卷	光緣述	1	
80	章門雜孔目四卷	智儼述	4	大正/卍續/
81	要義問答二卷(世云五十要問答是)	智儼述	2	大正/卍續/
82	十玄章一卷(又有一本題云十玄無礙義者疑後人所述)	智儼述	1	大正/卍續/
83	六相章一卷(三性章附)	智儼述	1	
84	教義分齊三卷	法藏述	3	洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
85	科一卷	淨源述	1	永樂北/佛教大/中華/卍續/
86	綱目章一卷	法藏述	1	大正/卍續/
87	指歸一卷	法藏述	1	洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
88	策林一卷	法藏述	1	大正/卍續/
89	華嚴雜章門一卷(三寶章流轉章法界緣起章圓音章法身章十世章玄義章)	法藏述	1	洪武南/永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
90	三寶別行記一卷	法藏述	1	
91	金師子章一卷	法藏述	1	毘盧/大正/卍續/
92	明鑑鈔二卷	祐田述	2	
93	注一卷	承遷述	1	毘盧/
94	注一卷	昭昱述	1	

連番	現傳章疏名	著者	卷數	諸種 漢文大藏經收錄 現況 (其他 刊·寫本 包含)
95	雲間類解一卷科一卷	淨源述	2	永樂南/永樂北/嘉興/乾隆/縮刻/卍正/大正/佛教大/中華/
96	一道章一卷	元曉述	1	
97	大乘觀行一卷	元曉述	1	
98	九會章一卷	慧苑述	1	高山寺
99	略策一卷	澄觀述	1	大正/卍續/
100	修行次第決疑論四卷	李通玄述	4	毘盧/嘉興/大正/
101	會釋兩卷	李通玄述	2	
102	略釋一卷	李通玄述	1	大正/卍續/
103	十門玄義一卷	李通玄述	1	
104	十二緣生解述顯智成悲論一卷	李通玄述	1	毘盧/嘉興/乾隆/大正/中華/卍續/
105	眼目論一卷	李通玄述	1	
106	十門玄義一卷	亡名	1	
107	明難品疏一卷	曇遷述	1	
108	記一卷	曇遷述	1	
109	入法界品鈔一卷	智儼述	1	
110	入法界品鈔記一卷	義想述	1	
111	綱要三卷	澄觀述	3	嘉興/卍續/
112	錦冠鈔四卷(或二卷)	傳奥述	4	
113	經序別行崇福記一卷	紹詵述	1	
114	三品別行疏二卷(問明淨行賢首是也)	澄觀述	2	
115	三品隨疏演義鈔五卷科一卷	澄觀述	6	
116	行願品別行疏一卷	澄觀述	1	嘉興/乾隆/中華/卍續/
117	隨疏義記六卷科一卷	宗密述	7	卍續(普賢行願品別行疏鈔)
118	又隨疏記義三卷科一卷	宗密述	4	
119	又記義二卷科一卷	宗密述	3	
120	行願品別行疏二卷(仲希移本疏注於經下)	仲希	2	
121	釋義鈔四卷科一卷(宗密述仲希治定)	宗密述仲希治定	5	
122	鈔六卷	從朗述	6	
123	發菩提心戒本一卷	澄觀述	1	
124	淨行品別行疏一卷	從朗述	1	
125	鈔一卷科一卷	從朗述	2	
126	隨好光明品解一卷	王氏述	1	
127	修慈分疏二卷	思孝述	2	
128	略鈔一卷科一卷	思孝述	2	
129	要義問答二卷(僧傳云錐穴問答是)	智通述	2	龍谷大
130	一乘問答二卷(僧傳云道身章是)	道身述	2	
131	釋名章一卷	義融述	1	

連番	現傳章疏名	著者	卷數	諸種 漢文大藏經收錄 現況 (其他 刊·寫本 包含)
132	開定決疑三十卷	緣起述	30	
133	要決十二卷(或六卷)	緣起述	12	
134	眞流還源樂圖一卷	緣起述	1	
135	海印三昧論一卷	明晶述	1	大正/卍續/
136	要決六卷(或三卷)	梵如述	6	
137	佛名二卷	法藏述	2	
138	梵語一卷	法藏述	1	
139	音義一卷	法藏述	1	金澤文庫
140	傳記五卷	法藏述	5	大正/卍續/
141	纂靈記五卷	慧苑述	5	
142	感應傳一卷	胡幽貞刊纂	1	毘盧/大正/中華/卍續/
143	十地門答一卷	亡名	1	
144	四十二字章法門一卷	處恒述	1	
145	身土說一卷	善聰述	1	
146	賢首宗百門決疑解一卷	善聰述	1	
147	辨三義折賓問一卷	善聰述	1	
148	答頂山十二問一卷	善聰述	1	
149	注十玄門一卷	仲希述	1	
150	身土壽量指要一卷	仲希述	1	
151	答頂山十二問一卷	道璘述	1	
152	發菩提心戒本二卷	御製	2	房山石經
153	隨品讚十卷	御製	10	圓宗文類
154	隨品讚科一卷	志實述	1	
155	入法界品讚一卷	楊氏述	1	圓宗文類
156	禮文一卷	亡名	1	
157	禮文一卷	法燈述	1	
158	十會讚一卷	道英述	1	
159	九會禮一卷	有誠述	1	金澤文庫, 圓宗文類(序)
160	禮讚文一卷	永安述	1	
161	禮讚文一卷	處恒述	1	
162	禮讚文一卷	鑒仁述	1	
163	圓教修證儀一卷	處恒述	1	
164	入法界品禮讚一卷	善聰述	1	
165	普賢行願懺儀一卷	淨源述	1	卍續/
166	賢首國師禮讚文一卷	淨源述	1	
167	清涼國師禮讚文一卷	曇慧述	1	卍續/
168	浮石尊者禮讚文一卷	亡名	1	圓宗文類
169	杜順尊者碑一卷	許康佐述	1	
170	儼尊者行狀一卷	回濟述	1	
171	賢首碑一卷	閻朝隱述	1	大正/卍續/
172	賢首傳一卷	崔致遠述	1	大正/卍續/

連番	現傳章疏名	著者	卷數	諸種 漢文大藏經收錄 現況 (其他 刊·寫本 包含)
173	浮石尊者傳一卷	崔致遠述	1	
174	淸涼行狀一卷	淸沔述	1	
175	淸涼碑文一卷(與行狀亦有不同待勘)	裴休述	1	
176	寄海東華嚴大德書一卷	賢首	1	圓宗文類
177	修門人書一卷	圭峰上淸涼	1	

참고문헌

1. 원전류

• 『新編諸宗教藏總錄』, 『大小乘經律論章疏目錄』, 『東域傳燈目錄』, 『古聖教目録』, 『高山寺聖教目録』, 『華嚴宗章疏并因明錄』, 『玉岑山慧因高麗華嚴教寺志』, 『大日本古文書-編年文書』

2. 단행본류

• 朴鎔辰, 『義天 그의 생애와 사상』, 서울: 혜안, 2011.
• 全海住, 『義湘華嚴思想史研究』, 서울: 民族社, 1993.
• 陳永裕, 『華嚴觀法の基礎的研究』, 서울: 民昌文化史, 1995.
• 吉津宜英, 『華嚴一乘思想の研究』, 東京: 大東出版社, 1991.
• 鎌田茂雄, 『中國華嚴思想史の研究』, 東京: 東京大學出版會, 1970.
• 落合俊典, 『中國·日本經典章疏目錄』, 東京: 大東出版社, 1998.
• 大屋德城, 『寧樂刊經史』, 京都: 內外出版, 1925.
• 大屋德城, 『高麗續藏雕造攷』, 東京: 便利堂, 1936.
• 木村清孝, 『初期中國華嚴思想の研究』, 東京: 春秋社, 1977.
• 石田茂作, 『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』, 東京: 東洋文庫, 1930.
• 奥田薫, 『高山寺經藏古目録』, 東京: 東京學出版會, 1985.
• 李惠英, 『慧苑撰『續華嚴經略疏刊定記』の基礎的研究』, 京都: 同朋舍, 2000.
• 竺沙雅章, 『宋元佛教文化史研究』, 東京: 汲古書院, 2000.
• 平岡定海, 『奈良佛教の展開』, 東京: 雄山閣, 1994.

3. 논문류

• 金天鶴, 「『華厳十玄義私記』所引の『三宝章』の意義－称名寺所蔵「十玄章」の発見を契機に」, 『佛教學研究』53, 서울: 佛教學研究會, 2017, pp.27-51.
• 南權熙, 「諸宗教藏文獻을 어떻게 접근하고 연구할 것인가」, 『東아시아 佛教章疏와 大覺國師 義天의 諸宗教藏』, 서울: 고려대장경연구소, 2017, pp.90-103.

• 朴鎔辰,「高麗時代 敎藏의 刊行과 流傳 및 그 意義」『韓國學中央研究院資料集』, 韓國學中央研究院, 2012., pp.179-238.
• 崔鉛植,「文超の著述と元曉思想受容の再檢討」『東アジア仏教研究』11, 2013, pp.119-131.
• 木村清孝,「智厳の著作について」,『金澤文庫研究』22, 横浜: 金澤文庫, 1976, pp.8-20.
• 佐藤厚, 「澄觀撰 『十二因緣觀』の著者問題」『南都佛教』86, 奈良: 東大寺, 2005, pp.186-201.
• 山本幸男,「華嚴宗關係章疏目錄-勝宝錄·圓超錄を中心に」,『相愛大学人文科学研究所研究年報』, 大阪: 相愛大学人文科学研究所, 2009, pp.25-34.
• 石井公成,「『一乘十玄門』の諸問題」,『佛教學』12, 東京: 山喜房佛書林, 1981, pp.85-112.
• 張雪松,「法藏『華嚴三昧觀』研究」,『法藏과 동아시아 불교』, 서울: 東國大・中國人民大・中國民族大. 2018, pp.10-24.

The Transmission and Present Conditions of Huayan Commentaries in the Cultural Circles of East Asia

Park, yong-jin
Assistant Professor
Nungin College for Postgraduate

This paper is an analytical study on the transmission and present situation of the commentaries on Fuayan literature contained in the *Shinpyeonjejong-gyojangchongrok (新編諸宗教蔵総録)* in the East Asian Buddhist culture circle. For this study, we compared them with the Japanese lists on Fuayan commentary literature. The results are as follows:

Among 177 volumes of commentary on Huayan recorded in *Gyojangchongrok,* about 68 volumes are still in existence. There are four original texts of Huayan commentary including *Huayanjing-suishuyanyichao (大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔), Huayanjingshu (華嚴經疏),* etc.

The compilation and publication of *Gyojangchongrok* is related to the protection of Buddhism and ulmately, enlightenment. To fulfill this purpose, it puts the articles in a hierarchical order, <Gyung經-Non論-Socho疏鈔> and places the Huayan Patriarchs in a chronological order. Besides, it arranges a separate section for Silla (新羅) and Liao (遼) literature.

The Japanese lists compiled at the same time as *Gyojangchongrok* are *Kegongshushosho-narabini-inmyoroku (華嚴章疏并因明録)* compiled in 914, *Toikdento-mokuroku (東域傳燈目録)* compiled in 1094, *Koshogyomokuroku (古聖教目録)* of the Pingan era, *Kozanjishogyomokuroku (高山寺聖教目錄)* and *kegonshukyoron shosho-mokuroku (華嚴宗經論章疏目錄)* of the 13th century. These above four and

Gyojangchongrok were compared with each other.

In order to determine the transmission process and genealogy of Huayan commentary, this study reviewed the position of *Huayanjingsuishu-yanyichao* and *Huayanjīngshu* in the *Tripitaka*. *Huayanjīngshu* has forms of 20 vollumes, 40 volumes, 60 volumes, added by 30 volumes of *Enchorok (圓超錄)*. *Huayanjingsuishu-yanyichao* was circulated in the forms of 30 volumes, 40 volumes, and 60 volumes. Later, according to the *Gyonenrok (凝然錄)*, the 40 volume-books were mainly circulated around Todaiji Temple (東大寺). In the modern era, *Taishojo* (大正藏) contains the book of 90 volumes based on the *Tripitaka* from Ming Dynasty, and it is now being used in Buddhist studies.

Keywords

*Shinpyeonjejong-gyojangchongrok*新編諸宗教蔵総録, *Kegongshushosho-narabini-inmyoroku* 華嚴章疏并因明録, *Toikdentomokuroku*東域傳燈目録, *Koshogyomokuroku*古聖教目録, *Kozanjisho-gyomokuroku*高山寺聖教目錄, *Huayanjingsuishu-yanyichao*華嚴經隨疏演義鈔, *Huayanjīngshu* 華嚴經疏

2017년 11월 05일 투고
2017년 12월 12일 심사완료
2017년 12월 13일 게재확정